

禁他見 門外不出 奧秘相傳

本體道神澄水流九鬼神傳打拳體術

授 傳

鍊成館道場

右

相傳候事

年 日 日

本體 道神 澄水 流
打拳 術第 三十九 代
宗家

殿

本體 祖神 澄水流史論

元來、武道及び宗門は、韜韜神傳を骨子とせらるゝてゐる。韜韜神傳とは、大國主之命の行白にせらるゝたる神業を後世に綴り合せて、之を畏玉とし以て之を形に現はし首飾りとし皇位又は神傳祭主が首に掛けたものであるらしい。例之ば天地二個の親玉、之れを天の奥傳、地の奥傳と云ふ。奥と云ふ言葉は遠く離れてゐるも之を見悟る事の出来ると云ふ事である。故に天之卷は宗門の奥儀と言ひ、地之卷は武門の奥儀と言ふ。則ち韜は宗門の奥儀であり、韜は武門の奥儀である。此の二卷の奥儀が四つに區別せらるゝ四維の畏玉と云はるゝのである。故に中臣秘文、物部秘文は宗門の奥儀であり、大伴秘文、大日見秘文は武門の奥儀である。此四維の畏玉が豊臣時代より徳川時代に於て、百六卷の多数に區別せらるゝ工夫を加之らるゝ。故に根本は神明四維の秘傳と云ふのである。百六卷は寛永十七年庚辰十月江戸紅葉山下寶藏に納めらるゝが、四維の根本の卷を、高天々原秘詮之卷、秘証之卷

詮恪之卷 彰底之卷として残され居る。

此の澄水流の部は簡編五輪秘託之巻も基礎としたものが最初である。
之川を一子相傳として出雲武藏に於て傳承せらる。後吉之川を悟り會
得した昔は、名和庄住人源小太郎長高の一族にて名和七郎国高、大國
掃部清重、大國兔藏太て應、塩谷判官高貞、浅山二郎國光等であつた。
此の中名和七郎国高は高名にして、新三郎基長も之川に次ぐ。
元弘二年三月七日北條高時が暴逆によりて後醍醐天皇が隠岐國へ掃邊
行になつた時、出雲武蔵が仲子渡に馳集した。其の面々曰
名和庄小太郎長高（名和十年）一族、軍略武道達人名和七郎国高、新
三郎基長（後高野山寶徳院細谷庵室生家得道）と多れ、鬼五郎助高、
太郎長重、六郎太郎義氏、小太郎信貞、次郎三郎実行、彦三郎忠房、
鳥家彦七宗家、内河藤三郎、備中守義直、大國掃部清重、大國これ
大國鬼源太清定、日野三郎義行、日野二郎義光、成田小三郎重吾、（武
道達人にて美より天皇に従ふ）、悪四郎恭長（國造大社郎黨に稱する川
自害す）塩谷判官高貞、浅山二郎、金持五郎、大小景徳、石見國三郎

子藝の国能谷、小早川、美作国菅家、江見、芳賀、流谷、南三郷、備前国江田
原、言三吉、備中新見、成合、那須、三木、小坂、河村、左、眞壁、備前今平大
高太郎幸範、和の備後、三郎範長、知同、三郎親経、美井、射越五郎左衛門範貞
公多、中吉、美濃權介、和氣、次郎季経、石巻彦三郎、比土、他四国九州、
リ致ナク

後世に叙証之卷と稱して一後、音撰と弔ふ、心く高野山にて得道せし名和
行三郎基也より大因免源太清澄の子、免太清澄に於て、他神澄水流と
名を、其の伝受者曰一子鬼八郎清澄、成を小三郎の子、小次郎金吾の雨
石に傳授す、後小次郎金吾に紀州熊野り行者と名る、最し持術の達人に
て熊野法眼別当職とあり、た崇峰凡降貞に武道傳授す、時に平體澄水鬼神
流と稱す、崇師れは持術の達人にて後醍醐天皇に聞か小たる時、九鬼神
流と稱す、言上し九鬼神と賜ふ、こゝに於て
他神澄水流と澄水凡鬼神流と稱す

三郎凡藏人口述元々々八月廿八日の夜、花小院より天皇と頁の奉り、吉
非急と第すに、尊代の軍多敷追ひ来る、藥師凡降眞口薙刀を以て、向ひ

秋、往に藤乃の尖先折水、午に残る病を以て大軍の中に躍り込め、忽ち
敵と追ひ散らせり。天皇、隆眞の功を事の外喜びて、其の棒に如何なる
秘術ありやと尋ぬるに、隆眞祖師より傳授せられたる祖神の秘術なりと
と言ふし奉る。天皇、汝の秘術最高の力ありて神に如し、今日より九鬼と
改むべしと、時に九鬼姓を賜ふ。後隆眞より右馬允隆良に伝へられしよ
り、本依澄水九鬼神流と稱せらる。

正平十四年八月十六日、南地武光と共に、大洞鬼を太清澄口、征西大將軍
懷良親王を奉りて少貳頼尚と戦ひたり。一旗にて口名和伯耆守頭長、修
理亮義代、小次郎長生守にして鬼を太清澄口、只一騎にて敵の大軍の中に
荒山込み大いに是れも破る。十六年七月再び頼尚誅伐の爲、名和頭長、
南地武光と共に先陣に進み陣中に火を放ちて大いに之を破る。後に頭長
出家遁去致し、其子頭興、後同位、檢非使、彈正大弼、伯耆守に叙任、清澄口從
四位、越前守に叙任せらる。
別に、祖神軍略兵法の授任者、右小太郎行高より名和新三郎長年に伝し
内河民禪、師長祐之山を嗣ぎ名和太郎義高に伝、内河新三郎眞員に授任す。

此内河三郎真員、元弘三年、二條大宮にて討死す。此真員より熊野樂師、凡
隆真に伝授せるとある。恐らく隆真は内河新三郎真員に学ば
武道をば成田小次郎全吾に学ばしにあらざるやと思考す。
如何なる有名な武人でも、良師なくして習ふから武道を知る者少し、
始めに教師あり後、工夫し一流一派を成せる者少しども、師なき者少し
後世に其の教師、何人が知らざる為に、神に伝授をうく事々の説話と
す。然し其家名に残れる系圖、又史塵に現れる事ある、甲に槍術を学
び、乙に学ばし者、甲乙共に師伝連名が残されたる。為に今も、同一人が
甲流、且又乙流に連名されたる者もある。故に誤解せらるゝ事も多いが、
流連連名に口責任と史塵が有る為、同意ひが意ひ、高木揚心流に大國鬼平
を信があり、或史塵にて大國鬼平が高木源之進の道場に試合を望み、
を合の上、鬼平が破れる為、鬼平は高木流柔術と九鬼神流棒術とを併せ傳
ふるに到る。鬼平は播州赤穂の藩士と有るが之れは全くの同意ひで、赤
穂藩士は中山素石の門定貞であつて、大國鬼平は出雲の住人である。
又、大國鬼平が高木揚心流を伝へたるは高木源之進病弱の為、揚心流をも
受け嗣いで、九鬼神流と揚心流を教へたるに依る。その恰も石谷松太郎

降景が九鬼神流を考とし、揚心流と父の相伝として教へたる如し。其の

例は下總国香取の郷士飯篠山城入道長威が流の天真正の剣術修練し、自

己の工夫を交へ一流を立て新當流と辨すと云ふ事が関八州古戦録の中に

ある。さす水口上泉信綱の事を書いてある則ち飯篠家直の天真正伝神道

流の名口其の當時の詩である。亦ト傳も新當流なら信綱も新當流であ

る。一般に東方剣法と西方剣法の二合ふもので有ると云ふてある。此の

説口ふしく、ト傳が新當流の中より天を交へ、新當流のすでも勝水た

業を成した。故に一派の剣としてト傳流と稱したのである。ト傳自身

がト傳流と稱せしか否か口不明である。東方剣法と言ふのは、天武十一

癸未十一月安部真人東国の兵に劍橋体術陣法等を習はしむ、此の骨子と

して彰底之秘文を基礎とし教へたり。又持統三己丑年八月西方に於ては

兵に連年人をして、劍橋棒矛体術兵法陣営等を教習せしむ。

則ち東方に於ては安部の真人をして武道を教へ、各兵士に習得せしめたる

之が始めであり、西方に於ては天伴真人をして教習せしめた。こ水より

東方武道と西方武道と兩立し、西方武道の基礎となりしは秘詠之巻を骨

子としたのである。其水道に武道口あつたが、一般兵士に教へ、流派の

現は此の根をとなつたのは之に始りである

最古の武名

武道講話録に、劍を以て柄を立不と相手にしても自得出来得る、修練次第であると言ふてゐる。その口劍が變く早業は自得出来るが、其水を劍法と口云へぬ。余口棒術を教へ、一人一人修練の場合、五寸釘を杖に軽く打ちつて、突きに此の頭を突く可し。始め口釘は飛散るが、教へる練に依つて釘が飛ぶ柄に突くことが出来、而るに口釘が五分と分と柄に深く突き入る事がある。五分も釘が突き入れば一人筋である。又後の方に釘を長く打ち、杖に掛つて、此の釘が突き入る事、修練をすべしと教へる。用は一つ、杖に掛つて、杖になつたが、而して水が棒術なとけ云はつた。相手が其方に在り、棒の便法がある。之水を法と云ふ術と云ふりである。

打拳術も杖に葉たばとく、口釘にて稽古せしむる事あり、又上より功をば釣きして一人練習せしむる法しある。勿し之水と打拳術と口云はつた。之水は己水の体のこなし、受身、拳の便かたなり、練習で、勅かざる物と

相手として出来なくしては、相手を勤く人用口の心さめ

打拳術に於ても、斯くは如き不測の遠慮も必要であるが、之れが為

に体のこなし、早業の見事得よ、必至死と斯くは勝負に自信口置けぬ

生死を超越出来る打拳術の大流の流古からの流に絶体価値がある。

流名口系述せる如く多岐ありし、小生原吉の直新流、抑も宗矩から柳

生流、一刀流、竹内夢思流、高田流、神依不動流、神近天心流、辰口

流、澁川流、碓氷流、荒川流、荒川流、荒川流、天神五揚流等口系流

口残續してある

息呼高松先生の幼年時代、流名不明、其流一山、山に武蔵流体系が残有

してあると云ふが今日口系流

旭神澄水流の直流口高松先生に外ならず、此、皆依を受けし口、余只

一人である。

武風と言ふ言葉に、體成らずして剣も槍も其の奥儀の完成

出来ぬとある。是より武流口系、劍、杖、石、棒、の七つを具せしめて

めたが、まゝと為せしけり劍槍のみならず、此の法を習得するに先立つて口

作の心が肝心である。則ち武道は作術の発来ぬ者、武器を使ひこなし得ぬ
とまふのである。作術が充たし、古は剣が多く、今棒が有った。棒には
三尺棒と六尺棒が有った。則ち劍と櫛の代用品である。故に作術を才一
作とし、才二位が棒にして才三位は石であった。作術を行ふにも心構へ
の肝心であると同様に、石を投げるにしても、弓を引く場合等すべて武
道に於ては、作の備へが最も大切である。

江戸時代に於ては武士の鳴呼として、劍法であったから、武道全般を總
括して劍法と呼んでみたのである。

武道の淵源は遠い。太古の人類は以て石に具へた作力に依つて行ひ、必然
的に發展して攻防の作術を創造した事であらう。怒る後に木片を用ひ又
巖石を使用した事、或は推測される。其の中の象に扱き人岩に者、其の
板と、或は口誇り、又は他に表わされ、神祕の保全若くは勢力の發展の
為に教導せし事は想像される。

右の説明の如く、体術は武道の骨子である。

故に古止又の初に作術がある。孝謙六甲午年一月、大伴古磨、磨より

帰判、同道し承る唐の僧鑑真と云ふ者をして、唐の拳法を誦せしめ、後貞和年間、於て唐の殷王旭輪の臣孫仁師を義と云ふ唐の拳法の達人として、之れをト部宿禰兼貞に伝授す。兼貞は武田韜韜秘文中武道の作術に之れを工天し取入ル。打拳術と稱し吾に伝し、先聖冠者義秀之れを旭神打拳作術と稱し大いに傳ふたり。

予 文

凡不言打拳術、敵戰之道、禮、欲、嚴、枝、欲、正、力、欲、罷、氣、欲、必、勝、心、欲、一、凡打拳術之道、善、道、義、示、弱、勿、論、正、枝、身、體、縱、橫、如、飛、鳥、勇、悍、靜、淑、退、畏、則、強、危、則、突、進、落、付、敵、則、不、畏、通、者、勿、亂、則、為、突、進、善、次、枝、敵、察、顔、色、以、當、之、打、拳、術、極、意、也

稲葉冠者昌秀

少

譯讀

凡そ打拳の術と言ふことなかり。敵戰の道禮は嚴ならん事を欲す。枝は亂しからんことを欲す。力口窶ならんことを欲す。氣は必勝を欲す。

心は一寸^{ちゆうじん}ならんことを欲す。凡そ打拳の道は道義に等し。弱を示すは勿論
枝をふしくするなり。身体縦横なること飛鳥の如し。勇とは静を揮ふて
淑く退くなり。畏^{おそ}とは則ち密なるなり。危^{あや}とは則ち突進するなり。落付
け放つて則ち畏^{おそ}れず。通とは乱る、こと勿^なし。則ち突進を為すなり。
^{はかりごと}は壽は枝に次ぐなり。敵を察するは顔色なり。以て之れに當るは打拳術の
極意なり。

編者 冠者 昌秀 少

斯の如く打拳術に限らず、武道は言葉数多からず、禮義を重んじ、細付
く造口弱を以て示し、忽ち我ふに當つては猛然勇を揮ひ。一以て當めく
の覚悟を改めべし。退いては静淑人無きが如く、心にては再び来るべき
時の用意を成すべきである。一以て當く覚悟、則ち必勝の信念を堅持す
可きである。

天津韜韜秘文古止文曰、打拳術人式、今日禁不息、
 不可取大食、方其疑惑、是小食以、凡戰以力、久以氣、
 勝以固、久以危勝、本心固新氣、勝以理固以技勝、
 凡變化以密固、敵以何固、我為靜固、心以一、勝人有
 勝心、惟敵之視也、人有畏心、惟畏視、兩心交定、兩利
 若一、為之戰、惟權視之、凡戰以輕行、輕行則危、以重
 行、重則無功、以輕行、重則敗、以重行、輕則戰、故戰相成
 輕重

譯読

天津韜韜秘文古止文曰く、打拳術は人日を分つを戒む、人不息を禁ず
 取つて大食す可からず、其の疑惑に方つては小食を以て是らすなり、
 凡そ戦は力を以てし、氣を以てし、勝は固を以てす、久し行れば危を以て
 勝つ、本心固くして氣を新たにす、勝は理を以て固くす、技を以て勝つなり、
 凡そ變化は密を以て固し、敵は我を固た人、静を為つて心を固くするに
 一を以てす、勝人は勝心あり、惟小敵の視なり、人に畏心あれば、惟り親を畏小よ

西人交て西利をむ。一々若き日而之と為ふ。我は惟小權、之れを現す。
凡そ我は経を以て経を行ふ。則ち危を以て一重を行はば、功なきなり。
於て以て事を行はば、則ち敗れん。事を以て経を行はば、則ち我のなり。
我は我は経を相成すなり。

約了

之れ則ち天津韃靼古文章の勝身の神也。入字と解説法、墟使主の筆記なり。
とある。最古の以勝つ法として、之れ小のけ、古文章が残りたる。
現在天津韃靼真理教と云ふ宗所が、入及び、奈良、兵庫縣下に有り。此の
教主等が、慈油を天からと揚げ、之れを今にして、由緒から、知り、是れ、
昔にも聖人が、此の宗教の根を、天津韃靼人から、是れも、ついで、
高松を、教へたものである。

宗所 行術と教ある事と、この道、神流、水流、九鬼神流とし、云ふ。此は、
の方面に、絶体無敵とあると、この道、すく、意、打拳術は、空手に等しいが、
この道、すく、等しいと、心、すく、すく、打拳術である。後、その他
流が、絶体及び、よら、事、すく、すく、すく、すく、すく、すく、すく、すく、
例へば、如何に、刑が、勇、人、計、すく、すく、すく、すく、すく、すく、すく、
劣、未、得、る、が、危、神、逢、水、流、打、拳、術、を、有、る。此の流を、極めた人、少、な、い、

此由は一法一人の功、公伝授せしむるに在りて也。之由は、打合術の伝と云ふ
ものがある。道承者として口を授けしむる人もある。

髓 神 流 釋 文 寫

蓋善人好天道、不善人竊過人巧焉。今之無法必也、策
勵而凝、真為其樂、則所以養生而余常所誦也。學者不
識、空機而在、投於其私、竊其臂力、反成天道、以果於
虛、果為得術、則所以養生而不全常所戒也。方今所謂
天、辨精、韻通、神澄、水在、論十字、論心、妙、鈕、閃、鋒、者、唯以
全天道為術而已。古曰、得在者、思、失、全者、廢、祖師卜部
宿、彌、兼、貞、為、國、士、守、護、神、志、又、天、律、秘、文、賜、一、卷、終
煉、丹、起、強、而、凝、空、機、卓、然、脫、離、且、死、雖、乃、安、明、靜、得
授、之、術、又、加、之、以、神、丹、赫、機、真、空、三、者、而、以、養、天、神、
亦、用、之、盡、照、貫、純、粹、焉、於、其、枝、也、真、幾、赫、機、貫、機、透、敵
之、肺、肝、者、謂、之、長、透、貫、支、體、入、神、丹、故、真、妙、劍、在、其、矣
從、橫、揮、赫、揮、斬、空、機、割、敵、之、全、身、謂、之、遠、擊、測、軀、心、化

真空故衝子緋躍在其中矣無為而八分分身須與軀化
 敵擊我在前忽焉在後雖所向無不破所觸無不碎而虛
 平易支體從容無有凝滯者依之務修也故學者常能
 純此三者而尤要全其神定劍士不知此妙理而日月
 揮光縮袍專力於揮擊暴戾不知則失而欲求必勝必
 成之理者則蒙昧之甚不足以為道焉可得其妙哉
 今感君精鍊不懈故奉此術苟能則之無違則庶得
 其真玄南

貞和五丑年九月二日

出雲冠者義本乃

*譚讀口十元貞
 に記載あり

尊師大國鬼塚太清定公依判必授之天津鞆顯道神之卷口依於以無殘依授候
 者也石紀文大瀧頂已上能為箇者也故仁三年修業天津式相伝法仁依箇者仁
 志天假利仁依箇可加良佐箇事誓詞仁箇者也若志後之吾能者仁志天違背志
 道如諸相伝世浪神乃乃乃了能思為可肢御罪於蒙箇者也
 弓矢八幡神仁誓詞仁候

應安戊申 元年 二月 吉日

出雲 越前 義 秀

傳

大伴 小二郎 隆行

詩 流 旭 神 流 秘 文 寫

蓋し善人の天道を好め不善人の偏して人巧に趨く。今ハ兵法口必ずや
 策有り。勵人ど向て凝る。真に其の樂を為す口則ち徳を養ふ所以なり
 而して今常に誦ふる所有り。其の者後らざるなり。一は機而して技に任ずる事
 と、其の秘に在り。其の機力を恃り。及つて天道に度出リ。以て是處に果し
 果と術を得ると為す。則ち其の害する所以にして而して常に全せず。戒しむ
 所有り。今所謂 天津 瑞 龜 旭 神 澄 水 五 輪 十 字 論 心 妙 叙 閃 鋒
 とは唯以て天道と全しし術と為ふクナ。古曰く全きを得人とする者口昌
 人有り。全を失ふ者口廢す。其の所ト學ぶ術兼て其の因土守護を為す
 神也又天印 秘文 一卷と賜ふ。又イ 倭 丹 鬼 強 一 と 而 して 一 之 機 を 凝 らす。

卓然として生死を脱離す。乃ち明に安んじ静に之を授けり事を得と
 雖も、而も之小に加ふるに神内赫棧真空の者と以てす。而して以て天
 真を養ふ。亦之を用ひ盡す。純粹を照貫し其の枝を於てするなり。
 兵奔赫棧貫式透敵の肺肝は之小と長と謂ふ。透貫の支體は神丹
 に入る。故に真妙の劍あるは其小なり矣。從棧に赫棧を揮ひて棧を斬り
 敵の全身を割く。之小を遠と謂ふ。洎軀を撃つて心真空に化す。故に獅子
 舞踏其の中在り矣。世為にし而して八分、身を令つて優閑して輕化す。
 敵我を撃つて共に在れば忽其として後に在り向ふ所破れざることを世しと
 雖も喘る、ところ碎いて而して虚なることなり。平易なる支体、從容として
 凝滞あること世さ者は此小に依つて務修するなり。故に學者常に能く此の
 二者を純らにす。而して尤も其の神を令うせんことと要す矣。劍士此の
 妙理をえらざる而して日月の軀は緜袍を以て、専ら操撃に力む。若し
 之らず、則ち矢くして而して必勝を求めんを欲す。必ず之小理を成す者
 則ち豪味の甚しきなり。以て道と為すに足らざるなり。其の妙を得べけん哉
 今君が精録懈らざるを感ず。故に此の術を奉く。苟しくも能く之小に則れば

違ふこと無し 則ち勝つと、其の真と得と、之爾しつとふ

貞和 五己丑 十一月二日

小宮 雲冠 吉義 秀乃

序 文

心体一致の呼吸を知るべし。敵と我とに在ると決定されたる。則ち
勝か負か、之れに於て我れ負けざるは不勝、勝たざるは不負、故に十分
の勝に、十分の負あり。こゝに勝と得て負くる所を知り、負けて勝つ所
を知るは術の達人也、我れ事象に理を正しく、彼が事象に理を察知し、
心体一致を以て敵に因つて転化すべし。理は事よりも先立ち、体は技よ
りも先んず、是れ術の足らざる也。自然の理を以て不意とも変じ、不量
とも慮ざる者術也、故に我れ慮する所の一理を教して思慮分別を不發、
一心不乱に心体一致の呼吸にて當るときは、勝利を不疑。此の事能く本
分の正位に認得すべし。術を得人として法を学ぶ者に従ひ、心体一致、
一心不乱に然る時、常の練習が自然に転変自在の妙が現はる、是れ
一心の執行を以て伝授と離れて別伝に至る者也。

凡て術を得んとするに先立つて澄水の心を悟るべし。澄む水の水の心を悟る
所は邪氣と不生、午爻は其の一より転じ自然の形にして用意の構に不有
考へば水が如し。水に常の形なし、故に能く方圓の器に随ふ、構をせざ
るは方圓に従ひ枝を構後の真の位授也。此の術は方圓に随ふを以て利
を授ふ法也、故に心は水也。体は枝也。實を示して実ならざる枝を虚
と爲す、此逆也。實は必勝之位、虚は不定之勝也。澄水は實に不有、虚
に不有、引けば引くに随ひ、突けば突きに随ひ、自然の變化に應ずるもの也
故に敵の枝に心を止めず、如何なる時にも、澄める水が如く一心清静に
にして暴り無き時は、某方端水目の如く至水りと云ふ所なし。
古語に曰く遠不慮則必ず近きに憂ひありと、故に間に遠近の差別なく、
其の間に不守、其の憂を不行、人に敵さずして疾く其の取るに當り
一的なり。若夫言するが如し。澄水は敵の枝を以て我が枝となし、敵の
利を以て我利となす。是鸚の位と云ふ也。
是唯神澄水の術と悟るべし。

天心

荒木多門之介正澄 常に練習に入るに當つて心しい所を形を取る事に
努めする事と要す。然らざれば乱押りに當り玄理が生じて来る。玄理押
勝す不ふりも心しい真妙の技にて一不の勝を押る事に心掛けるがよい
其の爲には玄理の力を入れる事を止めて、只氣存だけで橋古をすると云
ふ風にして、動作を軽快に、柔らかなに、滞りなく出来る存にせねばなら
ぬ。之れと値神澄水流の氣と云ふ。非常に身人じた氣である。玄理に力
を入る道速にこり固つて、動作が重苦しくなるが如きは、決して武風の
道とは言はれない。之れは力の投はと云つて一般に忌み嫌はれる所々の
である。技を分すに足が其前足に踏ませよなくと口をらめとか、綱かい
所に一々心を取らねばならぬ。暗入存其の氣持で滞りなく、橋古熱心
で自然の存勢と取る事を初心者、注意とす。

心眼で悟りし押水は大剛也

いゝ極樂に刹り得るなり

正澄 爲

角力と體術

角力は昔仁天皇に成、成手七月四日高麻蹶連と野見宿禰に相撲と押らしめた
と云ふ事が歴史に残されてゐる。作術は紀元前にも既に用ひられてゐた。歴史的
に口傳武天皇の御世、兄宇迦斯、弟宇迦斯と平定せんとする時、弟宇迦斯
委伏すも兄宇迦斯せず。久米直等、を向ひて之れを組伏す。こゝに兄宇迦
斯の臣多く、方て杖ひひる。此の古事文、作術は表現せめし、且に秘術と盡して
刻今平手が残る。如く作術は古し古の歴史と有す。

此の作術と一名は、**双押**と云つた時代も有る。其**双押型**として作術に残され
てゐる。類々其の押と云ふ意なるも、此の**双押型**より**角力**の四十八手が生れ、
從つた説し有る。故に力及が、仍及かに有る如くいへる、例へば**双押**の
飛違と云ふ型より**角力**の外は**双が**を生れたる。この**斗**は**双口**のつに**組人**
て、**尻手**又は**五手**が**作**と捻ると同時に**相手**の足の外側に**手**と**作**けて**横倒**しにす
る状がある。平逆しの型より、**角力**の鴨の**入首**が生れた。鴨の**入首**とは、**下手**に入りに
四手子の**尻**に**首**と寄し、**及**り**逆**つて**倒**す。風雪と云ふ型より**角力**の**内**は**双**が**生**じ
た。内は**双**は**尻**手にて**相手**の**右**足を持って**捻**り**倒**すりである。其**善**の型より**角力**の**手**
ま**倒**りか**生**てゐる。逆段より**角力**の**取**つたり、**雨**落し、**小**手**反**、**小**手**反**は**四**つに**組**
んで**手**にて**敵**の**尻**手、**上**より**抱**き**込**んで**石**足し**敵**の**首**に**生**して**投**げる**技**である。
流石し、**り**合**手**捻り、**駒**返りより**肩**すかし、此の**肩**すかしは**尻**手を**相手**の**右**手**下**

三控きと云ふ法がある。一口相手の気を控く。一口枝を控く。一口体を控く。体を控くとは、足を拂ひ、或は体当りし、赤引倒す、凡そ隙を与へず、攻を回返に及べし。如何に業の早き者として、其の勢に各まわして、枝の若し後く川する。枝を控くとは、敵が一面、枝を若き人とした時、充分其技に攻撃を加へ置くと、枝が勇気に見出して逆も及ばぬと枝が控けるためである。

気を控くとは、大声の気合が肝要とす。大声の気合には、相手の気負けするものがある。初めは、相手方に対し、静かなる自然の姿にして、澄める水の如く、其の時々に勝負の悟覚あるべき事。一交敵と闘争に於けるや、全勢力を以て、之れに於るに旺盛なる攻撃的抖声、覚悟の決死の技が肝要である。相手は勝負とある、勝負には、捨身の覚悟こそ、武人の特色と知るべし。我勝事を心強く一貫すべし。如何に枝の達人と雖も肉体の力には限界がある。我が精神の猛烈なる力には限界なし。故に精神力の強きこそ断じて勝利者なる事を知るべし。

旭 神 澄 水 流

旭神とは大伴家傳書 天津鞆鞆秘文が基礎となりしものにして、現在の元九鬼子爵家の伝書では無い。九鬼家は中臣秘文を伝ふ。中臣家は口重として宗門にあり、たゞく、宗師九鬼隆真が格術を現口せし為、凡そ神流の武道は九鬼家が示家の如く言ひ伝ふるし然らず。貴と南家藤原保則に於る武道も依へ乙應三代末孫保應に至りて武門に勝れた

る為に、萬我十郎、二郎等も生れてあり。行に伴應口武風に務め、元禄年中、

平三内河内守忠秋に授け侍す。忠秋口神傳忠秋と通稱せられたる忠秋は、
櫻守叔入太孫孫判臣右家より生れて、從五位下右馬大允右守坂白川院の北面

にて伯耆より生れて、信濃国吉田射田内河守の地を領す。故に子孫地名を以て
家辨とす。右家の子、將田四郎右武吉所と稱し、鍾原右大臣家に仕へ、武者所、棟

梁たり。右家の子内河守忠秋の子、次郎孫忠秋が、旭神四方得次郎忠秋と稱せり。
旭神四方佐といふ、の武進に過す事にして、定神と稱し、諱なり。入九つ、の武進は

最高、の武人とも稱す。こゝには、高き武が四方の神通力ありと稱してある。
忠秋口田城泰盛に属し、弘安七年、北条氏の討討と戦ひ討死す。長田小太郎行高に弘

安五年卯月十三日、旭神の秘文を授け侍り。
忠秋に八郎氏忠、次郎右親と稱し、其子、小太郎行高に稱した。其子が即ち名知長年と

ある。其政長田小太郎行高口旭神佐武過長年、達人たり。長年、母口大方殿にして
後に尼とあり而後と稱す。旭神佐佐木と稱し、内河守部譯師お初に依へ、名知太郎

義高に傳授せり。内河守三郎真直佐武と侍て、凡鬼神佐法と稱してある。併し旭神の
室巻口元奥腹から侍しといひ侍へらる。此室巻口名知三郎基長之川を以て高野

山宝幢院細谷庵に依り侍尊設し文武兵法の達人たり侍。後此室巻口大國鬼藤太て磨
に佐授したが、後熊野法印藥師凡藏人に武進を伝ふ。こゝに於て藥師凡口九鬼神流

と稱し、て磨口旭神佐澄水之術と稱す。後卜部菟稱兼貞、磨の拳法を取入水澄水之
術ハ武術中の体術に拳法を加へ旭神澄水打拳術と稱す。出雲冠者義秀之川を佐授

せら川、本佐旭神流打拳術と稱す。大伴小三郎澄行之川を佐授せら川本佐旭神澄
水流と稱す。小三郎旭神澄水流を一子相佐として他の武術と九鬼神流と別し傳ふ。

公式構

飛鳥之構

此構は相手方まで
攻撃する人とする
る元を挿って飛び
かへう人とする構

撥返之構

此構へは相手方忽ち
来る事と心して
受けると同時に
撥返す構也



伏虎之構

此の構は弱を示して
相手を虎を交わす
とする構也
石足引の構
尻足引の構

自然之構

此の構は相手を
身と交わす
人自然の構

護身暴虎之構

此の構は口身と交わす
正に及撃に身人とする
構也



乳虎之構

此の構は最後まで
 護身の弱を示し及
 弊をなす構也

猛虎之構

此の構は敵まじに
 同近く迫り来る時
 之を流して忍ら反
 撃の構也



餓虎之構

此構は最後に
止む事を待ず
捨身の構也



心虎之構

此構は変化の
多き構也



此の構は打拳術としてト部宿禰が道神傳法に取入られたる時 打拳術
術としての構方である。

此の構を以て敵に望む事と虎擲龍掣と云ふ。 虎擲龍掣と言ふ事は、
英雄が互に狭小時の駈引であり、神虎、心虎、親虎、伏虎、乳虎、猛虎、
暴虎、餓虎、龍虎の心を形としてこの計勢と云ふておるのである。

此打拳術を行ふには、元より身軽く高飛横飛も必要だが此は練
習の斗口玄い。此法の原則としては敵の懐ろに飛び込んで敵を倒す
と云ふ虚実の法で移々例を挙げて悟る事を書残してあるが、先が一
例として或る奥山で一疋の猛虎と狼とが会ふた。虎口朝から食に
有り付いておぼい幸ひなりと狼と一掴みにせんとした処、狼は虎に
向って一寸待って下さい、私は現子供が生れ子供持ちですから十日程
待つてくれ、そうすれば子供が一人歩みする。其の時には必ず私の
身を差上る。と涙を流して頼んだが虎は容易に承知せず此の上は已
むを得ぬと、狼は忽ち全力を挙げて捨身で飛び込んた。虎の飛びかゝる

其の頭上と東風西風と飛び越えさう。雲を越えに飛び廻る。虎は焦意に疲れかけた処、狼は一つの穴に飛び込んた。虎は怒りて其穴を噛り返し、己が身がやうく入ると急ぎ穴の奥へ進んで行つた。一方狼は七回程前方の脱け穴から出て二つ穴を土で石を入り塞ぎ、次に虎が入り込んた穴も同様に塞ぎ付けた。虎は穴を塞がれしと知らず、潜り探し探り返し疲れかけた、遂に死んでしまつた。云ふ悟り話が残されてある。此の狼の場合子供が愛さに死を決して捨身に成で、虎の枝を控く意表技術に成たのである。虎は狼の手間にかゝらぬと云ふ自信が自滅せしめたのである。此の狼の取りたる捨身の精神が肝要である。

起 本 型 肉 運 動

上記の構は起本型、則ち空手にも必要なるは、空手に討する打拳作術にも必要で、言ひ替は打込み討勢にも受身の討勢にも必要だ。

故に起本型として打込型と受身型の二種に區別せらる。起本練習を充分にする事を根本とす。前古は立木を相手として練習を爲す習慣を小ども、現代は石又は粘土板の台を作り、丸木を立て其上より素にて包み、其の上より布で包み相手と改し、起本型練習を爲す。受身の練習には拳闘家の如くデツチボリル柵のボリルを天井より釣下げ受身の練習を爲す。

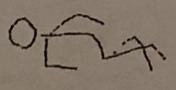
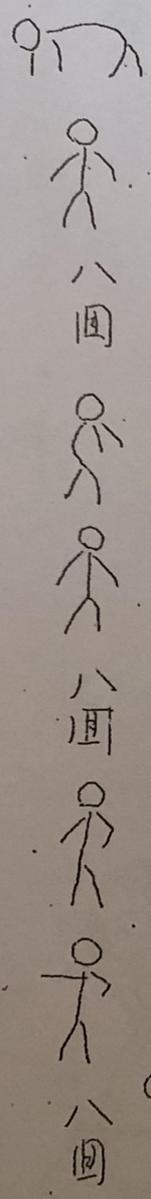
此の起本型練習の前に筋肉運動を常とする事

正坐 兩手を腰に深呼吸運動八回 右後に向、左後に向八回

安坐 兩足を前方に伸し兩手一文字八回深呼吸

仰向 摩擦上向、下向腹部に足腰摩擦呼吸運動

筋肉運動



此如く兩腕を充分に突き出し、又兩足も充分に跳上る起る練習に於て
最も平日の筋肉運動に効果を認められる。気合と共に右足後を前に
出す時、右拳を突く。左足後より前に出すと同時に左拳を突き出す
右足と後より前に出す時充分に上に拵える。気合に於て気力を増し
全身体の動作敏捷にして眼先体、両手、兩足を左右に開き、活動姿
勢とよくして、敏捷迅速、心気力を一致せしむる姿は、藁人形で充分練習
する事は、流汗と共に氣息も長く無理の無い、自然的な構養成の根本と
なる。姿勢の人数に討する場合は、後左に飛び、拳を以て前
方八回、飛び違ひて兩横に八回、後方兩手共八回と練習の事
デッサンボールの場合、右拳にて突き返すボールを左腕にて受け、撥
返す、返すボールを右腕にて撥返す、兩腕十字にして上に拵返す
斯の如き筋肉運動を練習する事

基本型

右拳

構を伏虎之構とし右足を引き併せ
斜めにしと氣合諸共右併右足共に
右拳にて相手方の左胸部に突入る
但し突さ入る方の拳は上向きにて
突さ入る時の拳は下向きにして突
き入る

之川を教師口受ける

二 左拳

其の通り左拳突さ合しり事



三、右手刀

心虎之構にて先づ左足を一寸引き
右手を杖が両部の糸に立て、左拳は
左脇に当て正に左拳を突き入る形
とす。気合諸共身体を前に乗り出
して右拳を變化し手刀にて右袖に
当てむ。右袖は口右耳なり。
腹を破る事有る可し注意を要す。
教師之川を受ける

四、左手刀

糸の通り左手刀にて当てむ事



五 右橋拳

橋は鐵虎之橋とし右拳を杖が後方にして左拳は敵の攻撃に備へ捨身の針勢で右合諸共右手五橋を立て、相手方の兩眼に向つて突く、但し左橋を真直に立て切ると非ず、橋を立て切ると痛める憂ひありて効果少なし、一は橋手とし云ふ。此の突きは、橋をばらばらに離して突く

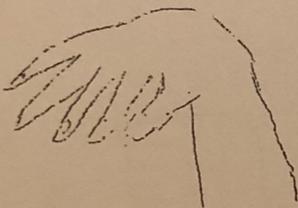
六 撞拳

四橋を揃へて四橋にて突く場合之水を撞拳と云ふ
教師之水を受けり

右鐵虎之橋



右橋拳



七 左橋拳

合しし

八 尾撞拳

合しし

尾撞之極



右撞拳



几 相 指

相指とは相殺指とも云ふ相指にて
突く養也、楯口鼻虎之楯を以て
かゝる。

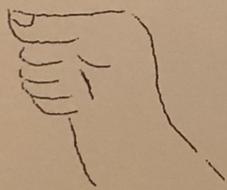
右足を後方に左足を前に出し右足
を少しめり左手を敵の眼面に向ふ
て真直に巻し、右手は脇に行けて
敵に向つて進み近付き忽ち変化し
右相指にて鬼門に当込む

鬼門とは雨乳の上なり

教師之山を受ける

十 左相指

左手にて突く



十一 押手

心虎之構 此構は虎手を己が面部
の糸に真直ぐ立て右手を右脇に當
て、敵の来らんとするに待つく云ふ
漢身的構にて進み虎拳を突き出す
と見せて相手方の手元に入込み
右手掌にて面部又は咽喉(頸)と
押し倒すうである。

教師之小と受ける。

十二 虎押手

虎手掌にて行ふ。



十三 爪手こま

之小も養と同しく心虎之構にて
敵の手元に飛込せし 而して（淋巴縮）
又け徳骨（咽喉の骨）等と桐を締め
るゝである。

十四 爪手

爪手にて行ふ枝



十五

躑 倒

ハツトウと曰躑にて倒すの意 飛鳥
 之拙を存す 右斜めに体と拙、右足
 を後に引き 守心と右足に置き、左拳
 と空きに空る如くして右足地を蹴
 て相手方へ胸部を躑にて蹴る

十六

足 躑 倒

足躑にて蹴る



十七 踏 倒

セキトウと口揜返之極にて、
固しく此の場合口高拳突と同時に
右足脛(膝頭)にて下段を蹴
り返すのである。

十八 左 踏 倒

左枝の事



右の十八型を最初に充分練習し活用出来る如く致す事。一見現代の
空手術の如く見ゆるも大いに異なる處がある。則ち此技が本流の技
なるに依りて、本流澄水流は此技に對して自由に投げ又は歸せ倒す事
が可能なるも、右技の練習は必ずしも口事實上の討技にならざればかり
でなく、古ト部商稱の撞拳は石とも削つたを云へるを見ては鷹手を
も利用し、最右は矢張り体術にて捕縛へたるし、如し。
此の十八型を朝鮮十八型と云ふ。昔古朝鮮人の技として存つたもの、
の如し。鮮人の戸口に石を釣下げて岩人に此石に頭を打付けて頭面
部の痛みに耐え忍び練習して此の技を用ひしと云ふ。
但し鮮人の構は丁を両手と上げてへ歸せ倒す如き構である。

基本 欣受身

自然 体構

両手を両腰に当て相手方の顔面を見つ、正面に向いて
強を示さず弱を示さず澄水の心を以て柔水と構へる。

相手方が胸部又は腹部を拳にて突き来る場合は足にて
蹴返す場合の受は

相手方右の来る場合は其儘 左足を後ろに体と并べし

右腕張りし腕に拳をよけ 左拳来る場合は右足を引き

足腕其儘にて受ける 是の場合も体と斜めにする事に依つて

之れ分ち受け得らる、也。

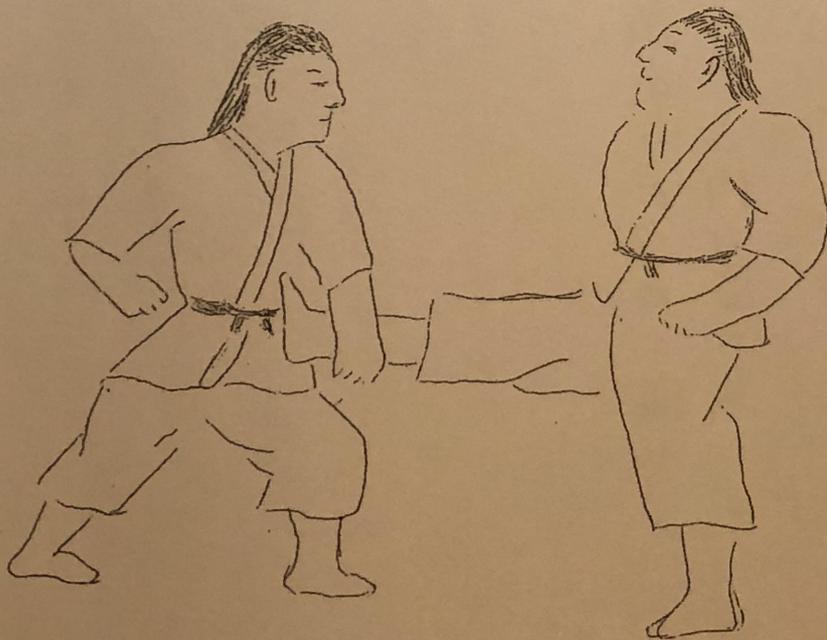
伏虎之構

自然体とよく似たる構へなり其正面を向かず足足を引く又右足を引く体を斜めにして構へる。

相争ふ方右拳にてうきま込め来るときは左腕にて下より上部に跳ね上げて受ける

左拳にて突込め来る場合は左足を引き右腕にて下より上に跳ね上げて受ける一方にて受ければ忽ち一方にて打込め其体勢も動へる

是の場合も下圖の通り受けるもの也



乳虎之構

右拳を後ろに左拳を前に受身の
形にて構へる 敵右足にて蹴り
来る時は左足を一步引き右拳に
て外側へ下図の如く敵の足を受
け流し忽ち左拳にて敵の面上に
打ち行ける受け方

乳虎形受けは其の通り
左構へり



猛虎之構

此の構に出でたる時口、相手方は足を以て下段に蹴り込む事は出来
難し、敵は足を以て胸部以上を蹴込ませるか、然らざれば手元へ飛
ひ込ませりたる拳にて突込ませるかの外、攻法なし。
故に相手方右拳にて突込ませる時は、我れ右腕にて右側を受け流
と同時に左足飛込ませるにて相手方の右腕、中関節の筋古着を掴み
引込むと同時に右拳にて相手方の面部に打込む。

猛虎 左技

全いく左構へなり

暴虎之構

此の構へは相手方絶体^に近づく事出来難く相手方に僅かの
隙にてもあらば、我れより左拳右拳にて打込む事が出来
我れより相手を引き寄せんとするには体を少し動かして
相手に来れと誘ひを入れる構なり
誘ひに集り相手打込み来ると一反体を引いて忽ち反撃を
なすもの也

我れの掛引は非常に難事也
實地鍛練の上にて悟り得るもの也

扱護之構

扱護之構と云へるは扱護は受身にして構は變化したものである。構は心虎之構と改し心虎之構が變化して扱護の受身となるのである。

扱護と云ふ事はサ護リ扱むの意にして相手方が右拳左拳と突き打ち来るを兩腕にて十字形に挟み止むのである。

体は變化して足端を後ろに引き体と斜となり、右拳と閃側にして十字形を受け止め、右拳にて相手方の打ち来る腕の中関節の稽古着と相引くかと右足を引くかと同時に忽ち左拳にて相手方の面部に行くものである。

此八法護身を八光受身とも云ふ。此打拳を充分に練習改す事が術修得の基根であり昔は中極音心とも云ふたのである。現代にては初段形修終と云つてゐる。